

R・ダニエルズ

国際社会主義運動研究会訳

ロシア共産党党内闘争史

現代思潮社

ロシア共産党党内闘争史

R・タニエルズ
国際社会主義運動研究会訳

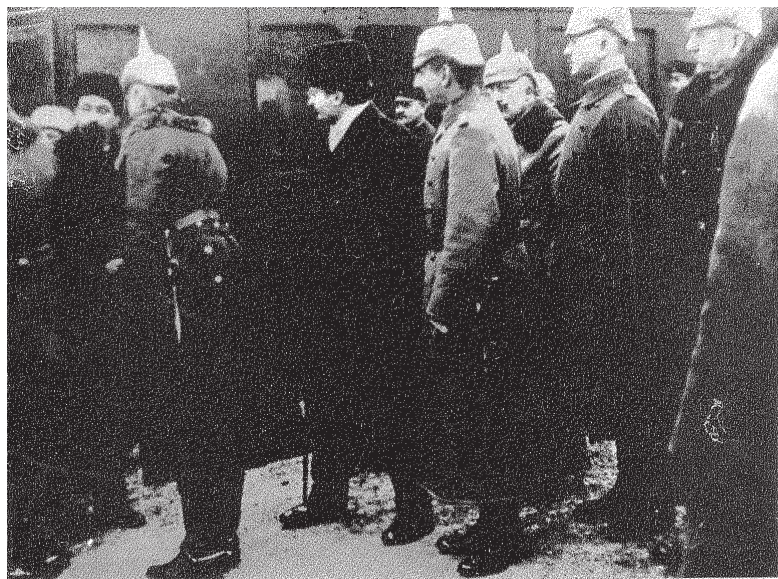
現代思潮社

**Title: THE CONSCIENCE OF THE REVOLUTION;
COMMUNIST OPPOSITION IN SOVIET**

Author: R. V. Daniels

Originally copyrighted by Harvard University Press

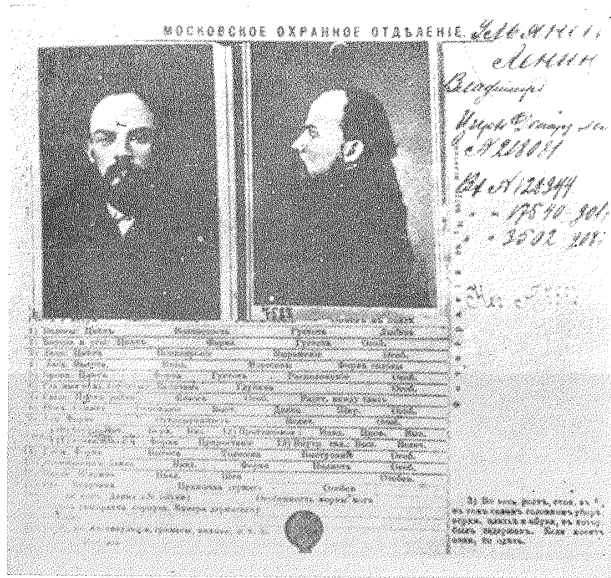
*This book is published in Japan by arrangement
with Harvard University Press through Charles E.
Tuttle Co. Inc., Tokyo.*



ブレスト・リトフスク講和 ソウイェト交
渉団長トロツキー(中央) 一九一八年三月

モスクワを散歩する——左よりスターリン、ルイコフ、カーメネフ、ジノヴィエフ





レーニンに関する警察記録は、1895年の最初の逮捕の時から記されている。レーニンは、その後五年間を牢獄とシベリアで過ごすこととなった。



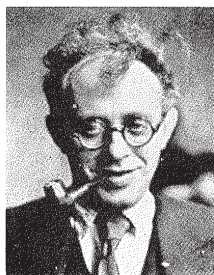
ブラウダ ポリシェヴィキの日報紙ブラウダは、1912年合法紙として創刊。レーニンは海外から寄稿した。上は創刊号のマストヘッド。



イスクラ 1900年12月、ドイツにおいてレーニンらによって創刊される。薄い紙に印刷されたイスクラは密かにロシアへ運びこまれた。



左よりスターリン、ブハーリン(コミンテルン議長)、オルジョニキーゼ。1927年



ラデック



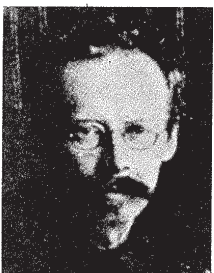
ルイコフ



ジェルジンスキー



A・オフセイエンコ



ビヤタコフ

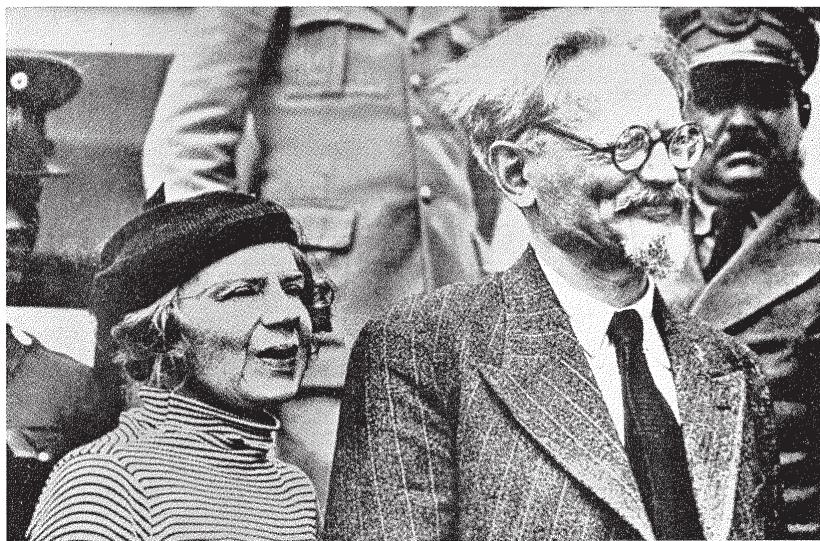


セレブリアコフ



赤軍の肅清 死の影漂う1937年メーデー。下段左よりトハチェフスキー、ピエロフ、ウォロシーロフ、
ユーゴロフ、ブジョンヌイ。上段スターリン(左端)、新秘密警察長官エジョフ(中央)他政治局メンバー

メキシコに着いたトロツキー夫妻。1937年



本書は、ロシアにおける共産主義運動内部の意見の不一致と、運動の指導者たちと論争を闘わせた諸グループの歴史である。それは、また当然にも、レーニンによるボリシエヴィキ党の創設から、スターリンによって真の反対派の最後の声が窒息させられるにいたるまでの、運動を分裂させた諸事件の歴史でもある。この著述の根底にある目的は、権力の座についてから最初の一〇年間ほどのうちに生じた、共産主義運動内部の諸変化について考察することにある。

ロシアにおける共産主義的反対派諸グループの研究は、ソヴィエト体制とその発展、その真の意義を洞察する上で、ユニークな好機を与える。諸事件が相次いで生じ、ロシア共産主義者の間に相次いで分裂が起るにしたがい、革命国家を形成した基本的諸勢力は劇的に現われるであろう。反対派の歴史は政治的発展のドキュメンタリーな記録である。何故なら、革命につづく数年のうちに、ソヴィエト・ロシアが経験した根本からの変貌の過程で、次から次へと、共産主義者の反抗的グループは追い払われていったのである。

およそ二五年というものあいだ、ソヴィエト体制の主要な政治的、社会的特徴は、西欧において一般的には全体主義として規定されるものに、多かれ少なかれ固定されていた。共産主義的反対派の歴史は、この体制がいかに形づくられていったかを説明する上で、きわめて重要である。歴史として以外には、反対派は二〇年間というもの——比較的にも、文字どおりにも——死滅したままであった。東欧の共産主義者の間には古い事件の反響がいくつかみられるとはいえ、ソヴィエト連邦にも、外国の諸共産党にも、反対派運動の直接の生きのこりはない。

一九五三年のスターリンの死につづいて、ソヴィエト連邦共産党の初期の歴史は、時局的な関心を集めた。フルシチョフによって率いられた後継の指導者がスターリン支配の行き過ぎのいくつかを非難し、党の過去に関する公認の誤った概念のいくつかをあえて修正しようとしたからである。これらのジェスチャー——なかんずく一九五六年の第二〇回党大会におけるスターリン攻撃——は、外国とソ連邦それ自身の双方に党史に関する興味をよびおこした。こうした時期において、党史、特に反対派に関するソヴィエトの態度は特に注目に値する。それは、公認の「心的状態」のドグマティズムにおけるなんらかの変化の指標として重要である。さらに、政府のゆるした訂正にもかかわらず、党史は、その過去についての確固とした、客観的な描写にむかってほんのわずか前進したにすぎないからである。もし真実が明らかにされたら、それはソヴィエト政治の新たな重要な出発点を意味することになる。

この著作は、ロシア研究センター (Russian Research Center) の援助によって書かれた博士論文 ('The Left Opposition in the Russian Communist Party, to 1924,' Harvard University, 1950) にその起源を有している。三年間にわたる研究を許してくれたことにたいするセンターへの私の感謝、以前に、または現在、このセンターに参加している私の同僚及び友人への、寛大な援助及び批評にたいする私の感謝は、測り知れぬものがある。私はまた、この著作を今みるような形で完成、改善するために、一年間というものをついやすことを許してくれた、コロンビア大学のソヴィエト連邦共産党史研究所に感謝する。私はとくに、ヘレン・パーソンス女史とロシア研究センターの書記スタッフの人々に、さまざまな支援を負っている。ハワード・スウェマラー、ジェリー・ホーは参考文献を照合し、研究の最終的なポイントについて私を助けてくれた。ローズ・デイ・ベネティット嬢は手稿のタイプと校正の大部分の仕事を引きうけてくれた。

私は特に、学位論文の指導教官として故ミカエル・カルボヴィツチ教授、マリー・フェインソッド教授から、及びロシア研究センターのソヴィエト行政、政治の研究指導者としてフェインソッド教授からうけた助言と援助には特に

謝意をあらわしたい。カルボヴィツチ教授には、ロシア問題の非常にこみいった学問への手ほどきをうけた。私の妻、アリス・M・ダニエルズと、レーモンド・パウアー教授、E・H・カー、アレクサンダー・エーリツヒ、ジョージ・フィッシャー、ハロルド・H・フィッシャー、アルフレッド・マイヤー、バリントン・ムーア二世、マルク・ノイヴェルト、リチャード・パイプス、アダム・アラムとロバート・L・ウルフは手稿のすべて、あるいは主要部分を読んで、批評してくれた。いうまでもなく、私の結論と欠点とは私自身のものである。

バリンントン、バーモントにて

一九五九年八月

著者

ロシア共産党党内闘争史 目次

はしがき

序 説

第一章 ボリシエヴィキ党の形成

党の理念……七

ボリシエヴィズムの左派と右派……二二

国際主義と諸分派……三三

第二章 一九一七年の革命におけるボリシエヴィキ諸分派——三六

永続革命……元

党の再武装……三三

メンシエヴィキ左派の吸収……三三

革命の綱領……四三

蜂起の問題……四四

連立か独裁か？……五三

七

三

第三章 プレスト・リトフスク論争と左翼共産主義者——七〇

革命戦争対独平和……六九

党分裂に瀕す……六三

労働者管理対国家資本主義……六六

レーニン主義的統一の確立……六二

第四章 戦時共産主義と中央集権化論争——七五

戦時共産主義への移行と中央権力問題……七五

国際革命と民族問題……七七

ウクライナ——反对派の城砦……七九

軍事反对派……八四

工業行政……八七

政治権力の集中……八九

党内民主主義の満潮……九三

第五章 労働組合論争——九六

戦時共産主義と労働組合……九六

トロツキーと労働の軍隊化……九七

組合自治と労働者反对派……一〇〇

労働組合論争……一〇四

第六章 一九二一年の危機——一〇

極左の撃破……一一

クロンシュタット叛乱……二五

党統一の鍛造……二七

第七章 レーニン主義の復活

三〇

ネップ——戦術か発展か？……二四

労働組合の規制……二五

下部党员に対する締めつけ……二六

政治権力としての党官僚……二三

第八章 空位時代

三七

権力継承と三人組……二三

民族問題およびレーニンとスターリンの分裂……二四

官僚主義と党の改革……二五

党機関の進展……二五

経済政策上の分裂……二五

権力継承のための策動……二五

第九章 「新路線」論争

二六

一九二三年夏の危機……二六

国外共産主義の諸問題——ドイツにおける危機……二七

舞台裏での論争……二七

公然の決裂……二八

党機関の勝利……二六

第一〇章 レーニン死後の党……………一〇

統一とドグマ……………一〇

「十月の教訓」とトロツキズムに対するキャンペーン……………一〇

永続革命対一国社会主義……………一〇〇

第十一章 ジノヴィエフ反対派……………一〇四

トロイカの分裂……………一〇四

農民とネップ……………一〇七

一国社会主義とコミンテルン……………一一一

党と書記局……………一一五

ジノヴィエフ反対派の崩壊……………一二七

第十二章 合同反対派……………一二〇

トロツキー—ジノヴィエフ連合の形成……………一二〇

闘争の経過……………一二三

工業化論争……………一二三

一国社会主義かテルミドールの墮落か？……………一二七

党内民主主義と官僚主義……………一二四

党統一の心理……………一二五

左翼反対派の壊滅……………一二五

第十三章 右翼反対派……………一二九

穀物危機とスターリンの左旋回……………一二九

コミンテルンと「右翼的危険」……二六八

モスクワ党組織における危機……二七〇

労働組合内の右翼反対派……二七六

経済計画化の問題……二七九

哲学的論争……二八八

公然たる分裂と右翼の失脚……二九〇

第一章 「人民の敵」

二九六

流刑地の左翼……二九六

失脚した右翼……三〇一

粛清の儀式……三〇八

死者は死なず……三二二

第二章 なぜ反対派は敗れたか？

三三八

反対派の政治的弱体性……三三八

レーニン主義の諸前提……三三二

社会進化の潮……三三三

マルクス、トロツキー、スターリン……三三六

スターリンのロシア……三三六

附 録

三三一

I ソヴィエト連邦共産党史における重要事件……三三三

II 主要党機関の構成……三三九

訳者あとがき

文献目録………三九(逆ノンブル兵)

註………四四(逆ノンブル)

ロシア共産党内闘争史

制作中

ロシア共産党党内闘争史 ©

1975年12月20日 新装第1刷発行

著者／R・ダニエルズ

訳者／国際社会主義運動研究会

発行者／石井恭二

発行所／株式会社 現代思潮社 東京都文京区小日向1-24-8

電話／代表(943)4406 振替／東京1-72442番 郵便番号／112

本文印刷／株式会社東京創文社印刷所

装本印刷／広橋精版印刷株式会社

製本／有限会社今泉誠文社

(落丁・乱丁のものは本社またはお買求めの書店でおとりかえいたします。)

0022-60145-1909